

流れた流れた！

この実践は、「自由感と可塑性に富んだ園庭で、水や石を流す遊びをする3歳児～5歳児が、自分たちの遊びの面白さや興味を追求・探求していく事例」です。本実践の園は、「子どもたちの自発的な探究心を刺激し、継続的に探究したいとの心の要求に十分に答えられるような園庭」を目的に、長年にわたり改革を積み重ねてきました。「どれだけ掘っても、積んでも、水を流してもいい園庭」は、子どもたちにとって大変魅力的です。そして、子ども一人一人の遊ぶ姿から、興味・関心を理解し、思いに添った環境構成をし、子どもたちの「科学する心」の育ちにつながる体験を豊かにする保育の工夫をしています。

学校法人金城学院 金城学院幼稚園

3～5歳児

『科学する心の芽』を生み出し、それを『科学する心』に育てていくためには、子どもたちの心を刺激し続ける園の環境と、継続的な探究を可能にする様々な工夫が、園の保育そのもののねらいや、保育の形態と同時に一体となって実現されていることが望ましいと考えている。このような観点から検討を重ね、園舎改築の際に、園庭を子どもたちの探究心を刺激しワクワクするような場所とするために、『可塑性のある構造』となるように設計、再構築して保育を行ってきた。主体的な遊びを保育の中心に置き、子どもたちが心ゆくまでとことん遊び、探究することを大事に考え、それを実現できるように実践してきた。

場面 1. 「あ、流れた、流れた！」

<5月中旬>

- ・雨上がりの日、3歳児が、園庭の南側の水たまりを掘って広げていた。地面をひたすら掘る3歳児。それを見て4歳児が、地面に水路を掘り始める。長い筒を探してきて水を流している。
- ・数日後も、長い筒に水を流す遊びを継続。広げた水たまりにバケツで水を運んでいるのを見た5歳児が、「もっと水、ほしいよね」と言うので保育者と一緒^とに使えるような物を探しに行く。樋が一本見付き、さっそく水道からホースを引っ張り、樋に引っ掛けて水を流す。「わー、水、来た！」と、3歳児が水溜まりの水が増えたことを喜ぶ。すぐに**樋を流れる水の様子に興味をもち、手を入れていた。そして、水路にスコップ（大型シャベル）で土を入れて流し始めた。**



流れた、流れた



もっと流してみよう



そっち持って、行くぞー

- ・土の塊は、しばらくの間はそのまま、そのうちに樋の中で周辺部分から少しずつ水に削られ、やがて一気に流されていく。「あ、流れた、流れた！」その瞬間に子どもたちが叫ぶ。これを何回も繰り返す子どもたち。
- ・**土の塊が少しずつ削られているうちは、ほとんどの子どもたちが、固唾を飲んでジーツと見ている。**保育者もその沈黙に声をかけてはいけなさと感じ、見守った。そして、いよいよ流れた時の、子どもたちの爆発的な歓声。そのコントラストに発見の喜びを感じた。
- ・最初に土の塊が流れたとき、子どもたちは3歳児を中心に「ワー」とか、「おお、スゲー」などと言っていて、一瞬にしてその場が盛り上がったように感じた。保育者は、「流れたねー」と共感しながら見守った。
- ・すぐに次の子どもがスコップで土をすくい、樋に流していた。保育者は、子どもたちの「固唾を飲んだような」表情に気づいた。**実に真剣な表情で、少しずつ削られ、流れていく土の塊が、ある瞬間に一気に流されていく様子と水の流れを見守っている。**
- ・子どもたちは今、**頭の中で、あるいは体の感覚を通して、見たことの意味に思いを巡らせているのではないかと思われ、言葉をかけるのを止めた。**この後、塊が流れると、「流れたあ！」などと騒ぐが、再び土を入れるとまた削られる様子をじっと黙って見ることがかなり続いた。保育者もほとんど声をかけず、一緒に土の流される様子を見守った。

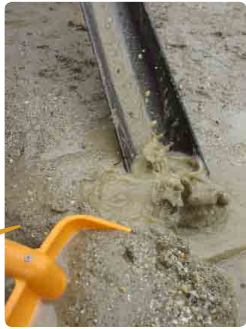
場面 2. 土質の違いを感じてー「小さな石は速いかな、大きい石はどうだったろうな」

<5月下旬>

- ・3歳児が、樋に繰り返し土の塊を流すのを見ながら、5歳児はまた違った発見を追求していた。土質の違う場所から小さい石、大きな石、土の塊や砂など、様々なものを持ってきて樋に流したらどうなるのかを確かめていた。
- ・そのうちに、**大きな石を流すと、樋から地面に石が落ちる時、「ドボン！」と低い音を立てて水しぶきが上がる時があることに気づいた。**同じ石でも毎回音をたてるわけではない。5歳児は、樋の傾斜を変えたり石を変えたり、「ちょっとごめんね」と土を流している3歳児にことわりを入れたりして何度も試す。結局、「必



いろいろな大きさの石を流してみよう



ドボン！
やったー

ずこの傾斜でこの石を流せば音がする」という決まった結果には辿り着けなかった。しかし、実に1時間以上、何人かで繰り返し試行錯誤を続けていた。そして時折、成功しては喜ぶ姿が見られた。

- ・「ドボン！」というお腹に響く音が出るたびに、「おお！」と喜んでいった。ここでも保育者は、子どもたちが納得するまで繰り返し石を流してみることが大事だと考え、まずは見守ることにした。流す石によっては、「ポチャン」と軽い音を出す場合もあったが、**子どもたちがこだわっているのは、お腹に響くような音のように見受けられた。**
- ・「水、もっと出してみて」「そこ、持って」などと、5歳児同士で声をかけあい、何とか**常に音が出る状態を作り出し、維持したい様子**であった。本園の園庭には、粘土質の土の部分や乾くとサラサラした砂になる真砂土の部分など、質の違う土をあえて入れてある。子どもたちは、**日頃の遊びの経験の中でそれらの土質の違いを知っていて、ままごとや泥団子作りに生かしている。**今回も、5歳児は近くの土を流すだけでなく、サラ砂を持ってきて流れ方の違いを見ていた。
- ・子どもたちは一回一回、「(音が) 鳴ったな」とか、「うーん、(音が) 小さいな」とか、納得したり感想を言い合ったりして、この日も1時間以上も決して飽きることがなかった。

場面 3. とことん遊び込むことで

<5月下旬>

- ・保育者は、樋だけでなく、分岐や方向転換などができるジョイントを増やした。さっそくこれを使って様々な流路を作って、子どもたちが自由に遊ぶ。5歳児は、接続部分にT字型のジョイントを入れ、水の一部は下に落ちて、残りの水はそのまま直進するような分配にしようと、水道の流速や、雨どいの傾斜角度などの、様々な要因を変えながら、探究する遊びが続いた。



これならどうかな？
いいんじゃない？



うーん、難しいなあ



おっ、うまくいった！



水、上に流したいんだけど

【考察】

- ・自由に掘り返すことのできる園庭、変形させることが許されている可塑性に富んだ園庭は、子どもたちの感覚の中に日常的なものとして定着している。そして、単に『与えられたすてきな園庭』ではなく、**自分たちが『主体的に作り変えていってよい園庭』であるということが、子どもたちの好奇心を強く刺激しているように思われる。**
- ・場面1で保育者は見守る援助をしたが、言葉をかけすぎてしまったら、一つの同じ現象を繰り返し徹底して観察する3歳児ならではのこだわりを十分に経験させられなかったのではないかと感じた。保育者は、保育の中で常に様々なことを予測したり、ねらいをもって言葉をかけたりすることを心がけるのが基本であるが、子どもたちが、考えや感じたことをゆっくりと、十分『めぐるせる』ことを大事にするには、あえて積極的な働きかけをしない方が良い、との判断が大切であると改めて考えた。
- ・子どもたちが、納得するまで「とことん」やってみることが、いかに大事であるかを再確認した。そのためにも、**自分たちの欲求に添って繰り返し、徹底して楽しむことができる時間と空間の保障**が、重要である。
- ・異年齢の関わりの中で、同じ場で遊ぶことで、お互いに刺激し合い、学び合っていることを感じ取ることができた。